

女性医師支援センター便り

次世代がさらに輝ける医療環境をめざして
～超高齢社会で若者に期待する～

第14回男女共同参画フォーラムに出席して



宮城県女性医師支援センター長
高橋 克子

5月26日(土)高知龍馬空港に降り立つと、東北の新緑とは違う濃い緑の景色を眺めながら会場に向かいました。横倉義武日本医師会長の「医師の働き方改革が重要な問題になっているが、女性医師の働き方は以前から討議され、この第14回男女共同参画フォーラムでさらなる発展が望まれる。」とご挨拶されました。高知県医師会長のごあいさつに続き、基調講演は京都大学大学院理学研究科生物科学専攻、動物学教室教授の高橋淑子先生から「次世代につながる生命科学とは」という講演でした。2017年上野の国立科学博物館で「卵からはじまる形づくり～発生生物学へのいざない～」を委員長として企画し、子供たちも含めなんと22万5千人もの来館者で記録を更新したそうです。受精卵から体が出来上がるプロセスに秘められた「不思議と驚き」を感じてほしいというメッセージが伝えられたと話されました。生命科学の基礎的なお話は理解が難しい点もありましたが、わくわくする期待感とご自身のあくなき情熱が研究を進めてきているのだと感動しました。最後に日本では年々軍事費はうなぎのぼりに増やされているが、科学研究費特に基礎的な分野の予算は、年々減らされている、「出口を見据えた研究優先」という科学技術政策は、科学者にとって大きな危機感を感じていると強調されました。そして、真に信用される国になるためには、学術こそが土台になると結ばれました。私を含め多くの聴衆に深い感動を与え、惜しみない拍手が送られました。

シンポジウムに入り、①一般社団法人高知医療再生機構理事長の倉本秋氏は、「偶然と集いの医療環境マネジメント：高知の試み」と題し、“医師不足の問題点などそれぞれの自治体や病院で解決できるものではなく、多くの方が自分を磨きながら、組織の改善やキャリア形成のための偶然の扉が目前に来るのを待っていたからなし得られるものです。既存の県・医師奨学金制度に加え、平成22年以降の若手医師のキャリア形成支援により高知の医療環境に対する評価が高まり、若手医師が増加に転じている成果があります。「高知で働こう」「高知に帰ろう」と考える医師に細やかな配慮や、男女共同参画の取組など幅広いプロジェクトを推進している”と話しました。②「若手医師が考える少子高齢社会のキャリア形成」と題し、高知県安芸福祉保健所の児玉佳奈氏は2年の研修を経て勤務しているが、キャリアプランニングを行う時期から男女共同参画に関する事柄として興味を持ち、ロールモデルとなる先輩に会う機会に恵まれるのが重要と結びました。高知医療センター初期研修医の岡村徹哉氏は、高知県初期臨床研修について、若手医師は減ってきているが、研修は自分で作る、未来は自分で作るというプロモーション・イベントを盛んにやったところ、マッチングが増え去年は最高となったそうです。最後に新専門医制度については、振り回され大変だった、医学的知識のみでは解決できないこともあり患者に寄り添

う総合的な知識が必要で、自分自身は新専門医を取りたいとは思わないと実直な感想を述べました。③「女性医師の現状，米国オレゴン健康科学大学，家庭医療科の現場から」と題し，オレゴン健康科学大学家庭医療科助教授の大西恵理子氏の講演では，米国では，1969年家庭医療科が認定され，毎年合計48人の研修医〈一学年12人×4年〉が所属し60%が女性医師で，妊娠出産する医師が多いそうです。そのための短期欠席・長期欠席のとき（Jeopardy），その援助に入る仕組みも充実しています。日本と大きな違いは全体の職員数が12倍もあり，女性研修医は3か月の産休を取り，父親の育児休暇をなんと27%の男性研修医が平均1か月取るそうです。医学部のシステムそのものも違いますが，研修しながらゆったりと子育てもできるうらやましいシステムだと感心しました。④「高知県医師会・高知県女医会の活動について」と題し，高知県医師会常任理事の計田香子氏は，高知大学医学生への男女共同参画や地域医療をテーマにした講義，新研修医と県医師会との交流会，中核病院訪問，特徴的なことは婚活支援で，親も巻き込んでパーティーを開催しているそうです。まだそれほどの成果は望めないが，成立すると高知に残る若手医師が増えるのではと思われます。

最後に第14回男女共同参画フォーラム宣言が採択され，第15回フォーラムは仙台勝山館で2019年7月27日（土）に開催される旨，当県佐藤和宏先生のご挨拶がありました。宮城県医師会および宮城県女性医師支援センターはなお一層努力し来年に向けて全力を注ぎたいものです。

第14回男女共同参画フォーラム 宣言採択

少子高齢化が進んだ我が国において，特に地方での医師の高齢化，医師不足，地域偏在，診療科偏在は，国民が十分な医療を受けられないという危機を引き起こしており，現在その対策が急がれているところである。

女性医師の割合は増加しており，その活躍をいかに支援するかが重要であることはもはや共通認識となっている。しかし，女性医師を取り巻く環境は改善してきている一方，意識改革についてはこれからも時間をかけて取り組まなくてはならない課題である。多様なキャリア形成を支援するには医療にかかわる全ての人々の理解が不可欠であり，早期からの教育や啓発が必要である。そして，男女の差なく若手医師が将来に希望を持ち，それぞれの地域でやりがいのある勤務環境を創ることが求められている。

私たちは，医療界においての真の男女共同参画を実現するべく，男女の相互理解のもと豊かな心を持ち，多様な価値観を受け入れ，真摯に学び続け，医療のあるべき未来を逞しく切り拓く人材を育成する体制作りを進めることをここに宣言する。

平成30年5月26日

日本医師会 第14回男女共同参画フォーラム



懇親会にて